

MR（麻しん風しん混合）・風しんワクチンの 接種を希望される方へ

1 風しんとは

風しんは患者の飛沫を介して感染するウイルス感染症で、発疹、発熱、リンパ節のはれを特徴とし、目が赤くなるといった症状がみられることもあります。潜伏期間2～3週間です。

通常、子どもでは3日程度で治る病気で、予後は一般に良好ですが、血小板減少性紫斑病や脳炎の合併を認めることがあり、まれに溶血性貧血もみられます。感染症発生動向調査によれば、平成30（2018）年～令和元（2019）年の風しんの流行（累計5,247人）で、血小板減少性紫斑病が21人、脳炎が2人報告されました。

大人が風しんにかかった場合は、その症状は子どもに比べて一般に重く、高熱が持続したり、関節痛がひどいことも特徴とされています。

2 妊娠初期に風しんにかかると

妊娠初期の女性が風しんにかかると、お腹の赤ちゃんに風しんウイルスが感染して、先天性風しん症候群の赤ちゃんが生まれる場合があります。感染経路は一緒に生活しているご家族からうつることが多いため、ご家族が風しんにかからないよう、ワクチンをうけておくことも大切です。先天性風しん症候群という病気は、生まれつきの心臓病、白内障、難聴といった心臓、目、耳などに色々な組み合わせで障害をもつことがある病気です。

3 MR（麻しん風しん混合）・風しんワクチンの効果

MR（麻しん風しん混合）または風しんワクチンを接種することによって95%以上の人が風しんウイルスに対する免疫を獲得しますので、ワクチンを接種してからであれば、風しんの患者さんと接触してもほとんどの場合発症を予防することができます。

いつまで免疫が持続するかについては、十数年間は持続すると言われていますが、獲得した免疫の状況や、その後の周りでの流行の程度によって異なります。

4 MR（麻しん風しん混合）・風しんワクチンの副反応

接種後の主な副反応として、発熱、発疹、じんましん、局所反応などがみられる場合がありますが、通常数日の経過で自然によくなります。風しんワクチンについては、10万人に1人程度の頻度で血小板減少性紫斑病の発生が報告されています。また、ワクチン全般で言われることですが、まれに接種後30分以内にアナフィラキシーという重いアレルギー反応を認められる場合がありますので、接種を受けた後は少なくとも30分間、

接種を受けた医療機関などで様子を観察しましょう。

5 接種にあたっての注意事項

(1) 他の予防接種との間隔

生ワクチン（MR、麻しん、風しん、BCG、水ぼうそう、おたふくかぜ、黄熱ワクチンなど）の後は、27日以上接種間隔をあける必要があります。

新型コロナウイルスワクチンとの接種間隔について、原則として、新型コロナウイルスワクチンと同時に接種できません。新型コロナウイルスワクチンとMR（麻しん風しん混合）・風しんワクチンは互いに片方のワクチンを受けてから2週間後に接種できます。

(2) 接種を受けることができない人

- ① 接種直前の体温が37.5℃以上であった人
- ② 重い急性の病気にかかっている人
- ③ ワクチンを受ける3か月以内にガンマグロブリン（血液製剤の一種で、重症の感染症の治療などに使われます）の注射あるいは輸血をうけたことがある人、あるいは、6か月以内にガンマグロブリンの大量投与を受けた人
- ④ 接種ワクチンに含まれる成分（接種医におたずねください）でアナフィラキシーという重いアレルギー反応を起こしたことがある人
- ⑤ 免疫不全をきたすおそれのある人及び免疫機能を抑える治療を受けている人
- ⑥ 妊娠をしている女性および妊娠している可能性がある女性
※ワクチン接種後は少なくとも2か月間の避妊が必要です。
- ⑦ その他、接種医から接種しない方が良いと判断された人

(3) その他注意すること

- ① 予防接種後30分間は、接種を受けた医療機関などで様子を観察するか、医師とすぐに連絡がとれるようにしておきましょう。
- ② 接種後4週間は副反応の出現に注意しましょう。
- ③ 接種当日は激しい運動は避けましょう。
- ④ 入浴は差し支えありませんが、わざと接種部位をこすることはやめましょう。

6 予防接種による健康被害救済制度について

この予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた際には、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法と特別区自治体総合賠償責任保険に基づく救済の対象となる場合があります。

給付申請の必要が生じた場合には、診察医師、保健所へご相談ください。